

市民メディアの「デザイン」に関する歴史文化研究 —イギリスにおけるワークショップ運動を事例に—

鳥海希世子 (東京大学大学院情報学環 特任助教)

・ ワorkshop運動とは

本研究は、1970年代後半から80年代の英国において展開したワークショップ運動(以下、WS運動)について考察した歴史文化研究である。WS運動とは、独立系メディア制作者や映像作家、一般市民によるオルタナティブ・メディア運動であると同時に、英国各地に生まれたフィルム・ワークショップ(映像製作所、制作集団などの意味。早いグループで1960年代後半に誕生)を中心として、地域社会のなかにメディアを通じた総合実践を展開させようと試みた社会連携活動でもあった。各ワークショップで制作された番組(社会的マイノリティを対象としたもの、芸術性や地域性の高い作品など)の一部は、1982年からの10年間、チャンネル4を通して全国に放送されていた。

・ 問題意識・目的

パブリック・アクセスなどの制度論やジャーナリズム論、事例レポート的な研究が主流であったこれまでの市民メディア研究に対して、申請者は市民メディアの“活動”に焦点をあて、そのプロセスを「デザイン」の視座からとらえる研究を行ってきた(鳥海, 2013)。本研究はその問題意識にもとづき、市民メディア・デザインの枠組み(図1)にそってワークショップ運動の活動を具体的に掘り起こし、その可能性と限界を明らかにしようとするものである。

また、WS運動は、これまでほとんど英国の市民/オルタナティブ/コミュニティ・メディア史のなかで語られていない。市民メディアの先行研究では、BBCのアクセス番組に対するものが最も多く、WS運動に関しては、フィルムを含むオルタナティブ・メディア史のなかのごく一部で触れられている程度である(Dickinson, 1999; Fountain, 2007など)。そのため、具体的な活動の分析を行うとともに、WS運動の全体像を明らかにすることも必要となった。

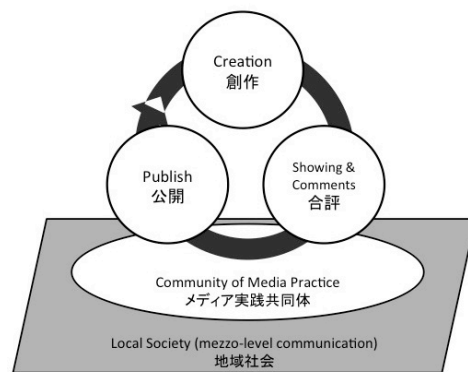


図1市民メディア・デザインの枠組み(鳥海, 2013)

・ 背景

1982年、第二次大戦後最悪の失業率を記録した英国において、WS運動はフリーランスとして働くメディア制作者らを支援する労働組合ⁱⁱの力によって誕生した。後にチャンネル4となる、英国第三の全国放送局設置に対する議論は1960年代に遡り、労働組合やその他の独立系メディア制作者らによるグループは、政党の浮き沈みとともに様々な主張を行ってきた(Macrobbie, 1982)。その議論の着地点にチャンネル4は誕生し、放送が開始された1982年から各地のワークショップでつくられた映像が地上波にのり、同年に労働組合による「ワークショップ宣言」が発行されたⁱⁱⁱ。

「小さな政府」を志向し、1979年に誕生したサッチャー政権は、新たな全国放送局の設置(特に、英国のメディア産業全体を活性化させることを目指したチャンネル4の方針)には肯定的であった。失業率の増加はサッチャー政権の歪みであったが、皮肉にも1980年半ばに全国で起こった炭坑でのストライキは各地のワークショップによって記録され、チャンネル4によって全国に放送されることになった。

1960年代からの市民運動やカウンター文化も、WS運動の系譜として位置づける必要がある。特に実験映像などを制作していた前衛芸術家やコミュニティ・アートの流れは、フィルムからビデオへというメディア技術の変容と表現のあり方、また、活動と社会とが結びついた営みとしても、先行実践であったと捉えられよう。

・ 対象・方法

本研究は具体的な事例として、英国第二の都市であるバーミンガムにあった **Birmingham Film and Video Workshop** (以下、**BFVW**) を取り上げている。バーミンガムが非常に民族的に多様であること、前衛芸術活動などの素地が1960年代から存在していたこと、バーミンガム大学の現代文化研究センターがあったことなどから、この地を選択した。**BFVW** は、1979年に誕生した。チャンネル4設立時にフランチャイズ化された10のワークショップのなかの一つであり、最大で6名の有給スタッフが活動していた非営利組織である。作品制作だけでなく、メディアをめぐる教育・研究活動も積極的に展開し、若者文化、メディアと政治、女性と表象など様々なテーマを扱っていた。

研究方法としてインタビュー(7名)を中心に、インフォーマルな聞き取り(5名)、一次資料(**BFVW**の文書やチラシ、**BFVW**へ財政支援を行っていた財団 **West Midlands Arts** の会議録など)やアンダーグラウンド新聞、コミュニティ誌の調査、そして映像作品の視聴を実施した。

・ 結果・分析

市民メディア・デザインの枠組み(図1)にそって、**BFVW**の活動について明らかになった点を示したい。

まず“創作”では、**BFVW**では作品制作を通して「現代文化に対する批評」を行う、という精神が共有されていた点あげられる。**BFVW**には、直接・間接的にバーミンガム大学現代文化研究センターとの結びつきがあり、この批評精神には同センターからの影響を見ることができる。一方で、実験映像などを制作していた前衛芸術家やメディア・アーティストらとの交流は、あまり見ることはできなかった。但し、この点については**BFVW**に限らず、WS運動全体を通して、ワークショップによって映像表現そのもの(メディアのフォーム)を追求するグループと、より内容(メディアのコンテンツ)に重きを置くグループという2つの性格が存在していたことが明らかになった。

次に“合評”についてである。**BFVW**の作品が、チャンネル4による放送以外で「受け手」に届けられる場所として上映会があげられる。それらは主にインディペンデント系の映画祭、コミュニティ施設や大学でのセミナーや上映会であったことが分かった。上映後に制作者が登壇し、ディスカッションを行うことも多く、**BFVW**が自ら企画した会ではテーマを設定のうえ、過去の商業映画とセットで上映会を実施することもあったという。インタビューからは、そうした場での合評、またシンポジウムやセミナーでの議論が、次の作品制作に対するアイデアにつながっていたという話を聞くことができた。

最後の“公開”は、チャンネル4について述べる。各地のワークショップとのやりとりを担当していたのは、チャンネル4のなかで比較的小規模な **Independent Film and Video Department** であった。この部署はワークショップの担当であると同時に、第三世界でつくられていた映画を発掘する業務も担っていた。インタビューでは、ワークショップの作品をコミッションすることも、世界中から集めた映画をコミッションすることも、チャンネル4にとっては同等の営みとして捉えられていたことが確認できた。20代後半から30代前半の白人男性が多く視聴していたとされるが、視聴者からの直接的な反応はそれほど多くなかったという。また、同部署のメンバーには、1968年以降の運動精神が共有されていた。ただしWS運動における同部署、ひいてはチャンネル4の役割については、十分な自己評価が行えなかったと後にふり返っている(Fountain, 2007)。

・ 考察

本研究を通して WS 運動全体について明らかになったことは、それぞれのワークショップは各地域のコミュニティに根ざしてはいたものの、中心的な参加者の多くには地域や社会的マイノリティの声を代弁する作品を自ら制作する「映像作家」的な意識が強かったことである。そうしたなかで BFVW は、一般市民とともに作品を制作したり、教育に関するプログラムを企画したり、その他の市民グループと連携するなど、自らの映像制作だけでなく、積極的に社会との連携活動を展開していた。メディア文化を学び、育てる活動をいかに地域コミュニティと結びつけることができるのか、どのように BFVW がそのための総合実践となり得るのか、という視点が明確に持たれていたのである。そこにはいわば、地域との連携によるメディア・リテラシー教育、もしくはパブリック・アクセス活動といえる側面があったといえる。

以上をふまえながら、市民メディア・デザインの枠組みに BFVW の活動を照らしてみたい (図 2)。この枠組みでは、創作・合評・公開それぞれの活動は「ふり返り (Reflection)」で結ばれている。例えば、上映会でのディスカッション (合評) から次の作品のアイデア (創作) が発想されたり、放送されること (公開) でオーディエンスから新たな反応をもらい、更に作品に対する議論が活性化したり (合評)、別の作品の構想に結びつく (創作) ということである。それぞれ追加の環として図に描くことができる。



図2

BFVW の活動を具体的に掘り起こして分かったことは、創作と合評は循環的に結びついているといえるものの、公開に至った後のその他の活動との連環は、あまり見られなかったことである。つまり、チャンネル4による放送は、制作者にとっては非常に大きなモチベーションにつながっていたものの、そこから新たな発見や視点を得ることはあまりなく、むしろ地域社会のなかで行われていた合評の方が、活動のプロセスを駆動させるには大きな役割を担っていた。現代社会における公開活動は、インターネットを含め大きく変化している。そうしたメディア環境の変容もふまえながら、本研究の成果を現在の問題と結びつけつつ、発展させていくことが今後の課題である。

・ 引用文献

- 鳥海希世子 (2013) 「市民メディア・デザイン：デジタル社会の民衆芸術をめぐる実践的メディア論」 東京大学大学院学際情報学府 (博士論文)
- Dickinson, Margaret. (1999). *Rogue Reels: Oppositional Film in Britain 1945-90*. London: BFI.
- Fountain, Alan. (2007). *Alternative film, video and television 1965-2005, The Alternative Media Handbook*. Routledge, 29-46.
- Long, Paul. (2009). *Essay: A brave cultural experiment. Participation: The Film and Video Workshop Movement 1979-1991*. Birmingham: vivid project. (An exhibition brochure)
- Macrobbe, Angela ed. (1982). *Four on 4: transcriptions from four open forums on the new television channel*. Stafford: Birmingham Film Workshop & West Midlands Arts.

ⁱ チャンネル4の歴史においても、WS運動がほぼ位置づけられていないことが指摘されている (Long, 2009)。

ⁱⁱ 労働組合とは、ACTT (Association of Cinematograph, Television and Allied Technicians) のことである。

ⁱⁱⁱ ACTT がチャンネル4、British Film Institute、English Regional Arts Association、Welsh Arts Council との合同で発表した。

^{iv} 大学院でグラフィックデザインを学んだ者、映画批評家、映像作家など20代～30代のメンバーが中心であった。プロデューサーの Roger Shannon は、バーミンガム大学現代文化研究センターを卒業後にこの職に就いている。

^v BFVW の活動に参加していたメンバー4名 (1名を除き有給スタッフだった者)、BFVW へ財政支援を行っていた West Midlands Arts から1名、バーミンガムで上映活動を行っていた市民グループから1名、チャンネル4から1名である。